年八月廿五日七十一歳を以て歿。法名を文光院吉平堂政己懇亭居士といふ。著書に能登日記二卷・土方舊領考・一柳監物殿始末記・精選能州四郡村名垣内帳等がある。

タナベロ　田邊輅　大聖寺藩士。通稱輅三郎・龍右衛門、維新後は龍衛といった。字は子冕、明庵と號する。初め竹内世綱に學び、安政中藩學の會頭となり、文久中江戸に役して安井息軒の門に入つた。この時輅固より既に一家の見識を備へて居たから、息軒は之を遇するに友人の誼を以てしたといふ。後又京師に遊んで、皇學を平田篤胤に問うた。是を以て輅置縣の際に至るまで、藩學の事一として參與せざるなく、餘財を抛つて書を購ふこと二萬卷、經傳子史悉く涉獵し、之に加ふるに强記を以てし、その講筵に臨むや快辯縱横、聽者をして倦むを知らざらしめた。明治三十年八月九日歿。年七十六。その著に明庵詩稿がある。

タナモリミヨウジン　棚森明神　↓テノマジンジヤ　手間神社。

タナヤチ　棚谷内　鳳至郡鶴町の内の小字。

タナリ　田成　藩政時代に、或る種類の畠地及び宅地を田と同一の價値あるものと認め、その面積に對して田同率の租を課するをいうた。享保十年の書上に、『百姓居屋敷並同廻り堀、菜畑、大根・麻・からむし畑、桑・楮畑、茶畠、漆木畑、豆畑、瓜・茄子・牛蒡畑、菅・藺・たばこ・ねぶか畑、種池、布晒場、此分田成に仕、折懸り不申候。此子細は居屋敷・布晒場之外、作物賣拂候へば、田成作德の及申程有之候。其上百姓食物には開勝手能御座候故、去年より右作物田成に罷成、折は懸り不申候。』と見える。↓ハタヨリ　畠折。

タニ　谷　河北郡金津庄に屬する部落。

タニ　谷　鳳至郡蛯野の内の小字。

タニイチジユウロウ　谷市十郎　祿二百五十石。寛文九年十二月御馬廻知行三百二石野々村勘左衛門と、勘左衛門の家に喧嘩し、市十郎は當座に死し、勘左衛門は後に切腹した。

タニカミ　谷神　↓ヤチカミ　谷神。

タニグチ　谷口　河北郡金浦郷に屬する部落。

タニグチ　谷口　河北郡若松の内の小字。

タニグチ　谷口　鳳至郡本郷に屬する部落。

タニグチガハ　谷口川　↓クマキガハ　熊木川。

タニザキ　谷崎（タンザキ）　珠洲郡春日野の北方にある小岬。一に端崎とも書く。

タニセソン　溪世尊　字は士達、號は百年。通稱知加多。讃岐の人。寛政中來つて金澤に寓した。世尊の學程朱を尊信し、四書經典餘師等を著したが、その註釋親切を極め、大に初學を裨益した。世尊また奥村尙寛の勸告によつて、時々藩校に經を講ずることもあつた。

タニタウゲ　谷峠　能美郡牛首（今白峰）から越前勝山に出る國境の峠。高さ九一四米。三州大路水經に、『牛首村より勝山への道を谷峠といふ。牛馬に一駄荷付る往還也。道程七里也。四里上り三里下れば舟橋川の端へ出る。』とある。

タニデ　谷出（タンデ）　羽咋郡西谷内の内の小字。地圖に谷口とするものがあるが誤であらう。

タニノジ　谷野寺（タンノジ）　鳳至郡西山の内の小字。

タニハシガハ　谷橋川　羽咋郡矢駄領かたいらから流出し、同領で倉垣川に落合ふ。流程四粁許。

タニムラチヨク　谷村直　諱は惟清。通稱を秀達又は周達に作り、後秀齋・周齋又は公哉と稱し、市醫を業として勤王の志があつた。初め藩命を以て松前に赴き、測量術を修めたこともある。元治元年七月前田慶寧の退京した時、同志小川忠篤と共に、急に近江海津に至つて事情を探つたが、歸路越前府中に於いて藩吏の捕ふる所となり、後公事場に繫がれて、十月永牢に處せられ、慶應元年五月廿一日病んで歿した。年三十八。明治二年十月藩前罪を赦し、三年十一月祭粢料をその家に賜ひ、大正十五年四月靖國神社に合祀せられた。

タニヤ　谷屋　羽咋郡土田庄に屬する部落。

タニヤ　谷屋　鳳至郡山田郷に屬する部落。明治中に至り、吉谷・神道と併合して柿生と改稱した。

タニヤソギヨ　谷屋曾魚　金澤の俳人。初號美雀。通稱平兵衛。車大に學んで鞍月庵又は子母川亭と稱し、後人日庵を繼席した。文化・文政頃の人。

タニヤマ　谷山　河北郡井上庄に屬する部落。明治八年十月に至つて淺ノ谷に併合せられた。

タニユキサダ　谷以貞　通稱與右衛門。貞享二年養父伊兵衛の遺知二百石を襲ぎ、大小將に班し、正保二年會所奉行となり、九年預玄院附物頭並として百石を增し、元文二年四月五十九歳を以て歿した。

タニリヨウネン　谷了然　眞宗東派の僧。弘化元年十月十日能美郡園來生寺に生まれ、嘉永三年正月から小松教恩寺に入り、安政五年本山の學寮に學び、慶應元年住職に任じ、明治二年六月擬寮司となつてから以降本願寺の教學に力を致すこと多く、遂に累進して三十七年大僧都となつたが、大正八年七十五歳にして病篤く、七月廿九日權僧正に補し、八月一日遂に示寂した。

タニロクエモン　谷六右衛門　初めて前田利常に仕へて二百五十石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

タニヰノリヒデ　谷井敬英　字は世昌、通稱もまた世昌。韓は敬英、玉洲と號した。寶曆十三年紀伊田邊に生まれ、若くして學者であつた。初め江戸に出て醫を學び、後漸く儒に赴いて諸國を歷遊し、寛政十二年金澤に來り、楠部屋芸臺に寄食して、富田景周・津田鳳卿・林蓀坡等と交つたが、後二年を經て去り、文化十二年再び來りて芸臺の家に投じ、文政三四年の頃こゝに歿した。著す所玉洲文集三十卷・韓非子譯解二十卷がある。

タネ　種　河北郡英田郷に屬する部落。寶曆の調書に、この村に高一丈二尺・根廻三丈七尺、及び高六尺・根廻二丈六尺の大石があつて、之を夫婦石といひ、又高六尺・根廻四丈八尺の石をくゝり石といふとある。

タネ　多根　鹿島郡石動山院内に屬する部落。能登名跡志に、『田根村とて、石動山の寺領百姓あり。此村に石動山へ勅使の宿せし者とて、百姓に四位といふ者あり。』とある。

タネガシマ　種ヶ島　鹿島郡瀬嵐の海上に在つて、周圍一粁。机ヶ島と相近い。併し能登